

二〇二二（令和四）年度 中学校

国語（一回）

〔注意〕

- 一. 監督^{かんとく}の先生の指示があるまで、中を開けないでください。
- 二. 最初に受験番号と氏名を解答用紙の指定欄^{しはん}に記入してください。
- 三. 字数指定がある問いでは、句読点・記号なども一字として数えます。
- 四. 解答はすべて解答用紙の指定欄に記入してください。
- 五. 下敷き^{したじ}・色鉛筆^{いろえんぴつ}を使用することはできません。
- 六. 問題は19ページまで印刷されています。
- 七. 試験の「開始」・「終了」は監督の先生の指示に従ってください。
- 八. 問題用紙は持ち帰ってください。

一、次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(字数指定がある問いでは、句読点・記号なども一字として数えます)

井田敦也と魔王こと堤奏太は学級新聞の係である。良い記事を書くために井田が思いついたことは、以前、自分がぬれぎぬを着せられた「ピンポンダッシュ事件」の真相を明らかにするための取材をすることだった。

「なんじゃ、その再現①なんかかって。」

藤堂さんは、しわのおくの目をかーっと見ひらいて、ぼくをにらんできた。

それだけで、すげー迫力はくりよく。八十三歳さいの貫ろくも加わって、寺院にある仁王像におうぞうってやつを思いだしたくらい。

——こわっ。

ぼくは思わずあどさつた。

勇気をふりしぼり、覚悟かくごを決めて対決しようと思って、きたんだ。②こんなことで負けてはだめだと思うが、体がかつてに後ろにさがる。

魔王はまるであてにならなかった。③

「それなら、協力するよ。」

ガッツポーズでそういったくせに、五メートルくらいはなれたところで、首をすくめてちぢこまっている。

「聞こえないのか。なんじやと聞いてるんだ。」

藤堂さんが顔をしかめて、一步ふみだしてくる。

こうなったら、もう、やぶれかぶれだと、ぼくはむねをはって、藤堂さんの目をにらみかえた。

「ぼくはピンポンダッシュをしていません。犯人にまちがえられて、めいわくしています。だから、そのときのことを、再現して、ぼくは何もやってないことをわかってもらいたいんです。うたがわれたままじゃ、いやなんです。」

藤堂さんは、考えるように空をあおいだ。

「そうか。あんときのピンポンダッシュの子か。じゃが、わしは、ちゃんと玄関げんかんをでて、道を見まわした。この道を歩いていたのは、おまえだけだった。ほかには……。」

「ぼく、『おまえ』じゃありません。ぼくは井田です。」

つい、いいかえしてしまった。藤堂さんの顔が赤くなった。

「こつちが話しているとき、口をはさむんじゃない。いいか。だれがなんていったって、おまえしかいなかった。」

口からあわをとばすようないきおい。

それにしても元気だ。八十三歳でこれなんだから、若いときはどんなだったんだろうと、一瞬いつしゆん、ぼうつとしてしまうほど。

いけない。今は、集中しなきゃと、首を横にふった。

「そ、それを再現してみるんです。あるとき、藤堂さんは何をしていたんですか？」

ちゃんと名字でよぶことができた。

魔王が、お年寄りの中には、おじいちゃんとよばれるのをいやがる人もいる、ちゃんと名字でよぼうといったからだ。

⑥ それは効果があつたらしく、藤堂さんのこわばっていた表情が少しだけゆるんだ。

⑦ 「あそこの花台で、花の手入れをしていたんだ。咲きおわった花をつんでしまわないと、次の花が咲かないからな。」

藤堂さんは、門をあけて、「こつちこつち。」とまねきいれてくれた。後ろにいた魔王もあわてて、近くにくる。

門から玄関まで飛び石が置いてあつた。その飛び石は途中とちゆうで二手に分かれていて、右にまがると庭のほうに続いていく。

藤堂さんは、門と庭との間あたりにある花台のところで作業していたらしい。

⑧ 「それでな、チャイムが聞こえた。わしは、腰こしをのばして様子をうかがった。柵さくのあたりに、緑の服がちらつと見えた。また、やられたと思い、いそいで、もっていたものをほうりだしてな。」

藤堂さんは、花ばさみを置いて、門にむかう。

「門にいったんじゃ。かんぬきをはずして道にでたら、走っていくおまえの背中が見えた。それでよびとめた。もちろん、よびとめる前に、右、左を両方ともよく見た。ほかにだれもいなかったんじゃ。まちがない。だから、おまえしかチャイムを押おすことはできない。」

藤堂さんは、最後に「わかったか。」といって、ぜいぜいと息をした。花台から門の外まで、五メートルもないけど、あわてたせいで息がきれている。

「ありがとうございます。」

魔王が ⑨ 前にでて、ていねいに、頭をさげる。

「もし、犯人が見えないようにかくれたのなら、どうですか？」

「かくれたって、そういうのは、わしはわかる。よく見たのだから。」

藤堂さんは、つかみかかるようないきおいでいう。

「でも、やってみたいんです。うまくかくれられるかどうか。実験させてください。」

ぼくは九十度くらいに深く頭をさげた。

「お願いします。」

魔王もとなりにきて、頭をさげた。

頭にじりじりと視線を感じた。藤堂さんがにらんでるからだ。

「やってみれば気がすむのか？」

カミナリのような大声。

「はい。チャイムを押して、かくれられるか、藤堂さんに見つかるか、ためしたいんです。」

ふるえる声で魔王がたのむ。

「そうなら早くそういえばいい。」

ヤッター。しぶしぶだが、再現すること、OKしてくれた。

藤堂さんは魔王のほうを見て、どうやるんだってたずねている。

「ピンポンダツシュのときと同じようにしてください。同じ場所において、チャイムを聞いてから動いてください。」

「わかった。あの日と同じことをするんじゃないな。」

藤堂さんは、花ばさみを手にとり、手入れを始めた。

ぼくたちは、いそいで外にでた。魔王とぼくはとなりの佐々木^{ささき}という家の玄関のあたりに立つ。

「よし、始めよう。」

まず、ぼくは前をむいたまま、急ぎ足で藤堂さんの門をとおりすぎ、そのまま歩道を走る。魔王は体がかがめてチャイムを押すと、さつと逃げた。

「だれだ？」

藤堂さんはかけてきて、がしやがしやと木の門をあけて外にでる。

右、左を見た。一歩前にでて、もう一度左右を見た。

それから、勝ちほこった様子でぼくを指さす。

「やつぱり、おまえだ。おまえしか見えない。」

「ちがいます。押したのは、ぼくです。」

となりの佐々木さんの家の車のかげから、魔王が立ちあがった。ガレージに柵がないから、車の横にもぐりこんでかくれていたんだ。

「なんと。」

藤堂さんはぼくを見て、ぽかんとした。

「ほんとうに、おまえは押してないのか？ わしの場所から、チャイムの位置は見えない。ごまかしてないか？」

藤堂さんは、慎重^{しんちょう}だった。魔王が押した証拠^{しやうこ}はない。それに魔王がチャイムを押したというだけでは、^⑩ぼくが押していない

という証拠にはならないといはる。

でも、魔王は^⑪しなかった。

「おれが押したという証明ならできます。」

ランドセルを地面に置いて、ふでばこから赤いサインペンを選んで、とりだし、それでチャイムのボタンを赤くぬった。

「おい、おい、やめろ。何をしてる？」

藤堂さんは目をつりあげた。

「こうすれば、押した人の指が赤くなるでしょ。だれが押したか証拠になります。あとで色はきれいに落としますから。」

「そうか。よし。意味はわかった。^⑫念のためおまえらの指、見せておけ。」

ぼくらは両手をパーにして藤堂さんに見せた。今、どちらの指も赤くない。

「押したやつの指が、赤くなるんだな。」

もう一度、藤堂さんは花台にもどった。

ぼくと魔王はさつきと同じ位置にもどって、^⑬同じことをくりかえす。

チャイムがなると、藤堂さんがとびだしてきた。

ぼくのほうをまず見る。

それから体をのりだして、となりのガレージのところを見た。かくれていた魔王が立ちあがった。

「たしかに、そんなふうになつちの車のほうにすわっていると、見えないかもな。よし。指を見せてみる。」

魔王が手をひろげた。ぼくもひろげた。

ひとさし指に赤い色がついているのは、魔王だけだ。

「ね、ぼくが犯人じゃない場合もあるってわかったでしょ。ぼくはやつてない。他^⑭にいるんだ。いたずらをした犯人が。」

えっへんとむねをはる。

「うーん。」

藤堂さんは目をしばたかせ、腕^{うで}をくんだ。^{*}

「じゃ、真犯人は、どこのどいつだ？」

声をはりあげる。

「そこまでは、わからないよ。」

「じゃ、おまえかもしれないじゃないか。やってないかもしれんということはわかった。でも、おまえでないという証拠にはならないぞ。」

痛いところを突かれた。

この実験で証明できるのはここまで。

⑮

可能性があるってところまでだ。

やっぱり、やってないことの証明、「悪魔の証明」はできないのか。

奥歯をかみしめたときだ。

「目撃者をさがそう。このままだったら、気持ち悪い。」

とつぜん、魔王が言いだした。

⑯ 「ここにかくれるのなら。」

そういつて、となりの佐々木さんという家を見る。新築のおしゃれな家で三階建てだ。

⑰ 「この家の人が見ていたかもしれない。」

「それはいい。この家のことはよく知っている。小一の龍介くんがわしの道場にかよっている。じつにかわいい子なんだが、弱しかったから、鍛えてやろうと思って、さそったんだ。」

げーって思った。ぼくが龍介くんなら、藤堂さんから剣道をならうなんて、ぜったいにいやだ。

「聞いてみよう。今、明かりがついてるから、だれかいるじゃろ。」

佐々木さんの家はガレージのおくに玄関がある形だ。藤堂さんはずかずかと車の横をすすんでいく。ぼくらはそのあとに続いた。藤堂さんはぼくらが後ろにいるのを確認して、チャイムを押した。

「わしじゃ。となりの藤堂だ。ちよつとすまんが顔だしてくれ。」

「はい。」

ミニスカートのおばさんがでてきた。目がくりつとしてかわいらしい。しかし、ぼくらを見ると、警戒するような表情をうかべる。

「どうかしましたか？」

「いや、忙しいときにすまん。聞きたいことがあって。こいつらが実験だとか調査だとか、うるさくいうもんでな。」

藤堂さんがそこまでいったときだ。

⑱ 「あーっ！ 見て。」

フレッシユグリーンのパーカーが、目にとびこんできた。犯人にまちがえられたとき、ぼくが着ていたTシャツと同じ色。玄関にあるハンガーラックに、かけてあったのだ。

「おっ。」

藤堂さんもそれに目をとめる。

「なんですか？　じろじろと。」

お婆さんはハンガーラックをかくすように前に立つ。

「いやその、じつはピンポンダッシュでな……。」

藤堂さんがそういったときだ。

「やはり、そのことで……。」

お婆さんはあきらかにぎよつと顔をひきつらせ、玄関にひざをついてすわりこんだ。

「ごめんなさい。あやまりにいいこうと思ってたんです。でも、龍介がいやがるから、つい、あとで、あとでとなつて。しかつてはいたんですよ。ほんと、ごめんなさい。」

◎「え、えつ。」

ぼくらはみんな、顔を見合わせた。

ガレージにかくれる子どものすがたを見ていなかったかと思ひきつた。話がちがう方向にむかっている。

魔王が一步前にでた。

「龍介くんがピンポンダッシュをしたのですか？」

「えつ、そのことできたんじゃないんですか？」

お婆さんが「まずった」という感じに口に手をあてる。

「ばかな。そんなはずはない。あの子はいい子だ。」

藤堂さんの声が大きくひびく。

すると、玄関の先にある階段から、ひとりの少年が

18

顔だけだした。龍介くんのように。

「ピンポンダッシュ、もうしません。もうしないから、ママを怒らないで。」

か細い声でそれだけいうと、すぐに顔をひっこめた。

「ガレージのところで、こそこそかくれていたから、問いただしたんです。でも、理由はあるんですよ。道場、やめたいから、藤堂さんにきらわれるようなことをしようと思つたつて。道場で怒られるのが、どうもいやだったらしく……。わたしが近所の手前、やめにくいからがまんしなさいといつてしまったから、こじれたのかもしれませんが。すみません。ほんとうにすみません。」

お婆さんが頭をさげる。

「わ、わしが、龍介くんをしかつたつてか？　あいさつは大きな声でとか、しゃきつと立てとか、そんなことくらいだろ。」

藤堂さんがそういうと、二階でひいっと泣き声があがった。

「藤堂さんにとっては、そんなことくらい、でも、あの子にとってはきつかったんです。あとであらためておわびにうかがいますから、今日はお帰りください。」

お婆さんはぼくらを追いだすようにドアの外に押しだし、がしんとかぎをかけた。

「龍介、だいじょうぶ？」

ドアのむこうから、そういつて階段をかけあがる音が聞こえた。

「なんだ。あれは？」

藤堂さんは、しょっぱいものをのみこんだように口もとをゆがめている。^{①9}

「わしが『道場、楽しいか？』って聞いたら、楽しいっていつていたんだぞ。」

「どんまいだよ。」

ぼくは藤堂さんの背中をたたいた。

「世の中、いろいろあるよ。ぼくもうまくいかないことばかりだもん。」

「お、おう。」

藤堂さんは、はずかしそうに目を細めた。

それから、深々とぼくに頭をさげてくれたんだ。

「わしの負けだな。犯人とまちがって、悪かった。わしのかんちがいったようだ。」

「よっし。」

ぼくは、小さくガッツポーズした。ヤッター。

つかめた。やっと、真実がわかった。

藤堂さんにもあやまってもらえた。

達成感がこみあげてきて、思わず魔王とハイタッチする。^{②0}

真実はぼくが想像したのとちがって、^{②1}ちよつとにがい味のものだった。犯人は藤堂さんがかわいがっていた子だったからだ。藤堂さんにいたずらしてきられようとしてチャイムを押したんだ。それでも、いざとなると、怒られるのがこわくなって、かくれてしまったのかもしれない。

どっちにしろご近所トラブルの一種なのだろう。

藤堂さんはすっかりしよげてしまっていた。でも、ぼくが帰るといって、よびとめてきた。

「もし、時間があつたら、ジュースでも飲んでいらないか？ 犯人とまちがえたおわびだ。菓子もあるぞ。」^{かし}

魔王は「ええっ。」と顔をこわばらせ、びびってあとずさり。けど、ぼくはかまわず大きくうなずいた。

「はい。いただきます。」

* しばたたかせ … しきりにまばたきをして

(赤羽じゅんこ『ぼくらのスクープ』による)

問一、——線①「再現」と同じ内容を示している言葉を、本文中から抜き出して答えなさい。

問二、――線②「こんなこと」とはどのようなことを指していますか。具体的な内容を「～こと。」に続くように、十字以内で答えなさい。

問三、――線③「あてにならなかった」とありますが、「魔王」はどのような様子なのですか。本文中の言葉を用いて二十字以内で答えなさい。

問四、――線④「やぶれかぶれだ」とありますが、この時の「ぼく」の気持ちとして最も適切なものを、次の（ア）～（エ）の中から選び、記号で答えなさい。

- （ア）もうどうにでもなれという投げやりな気持ち。
- （イ）どうせ勝てないとやけっぱちになる気持ち。
- （ウ）なにがなんでもたたかおうと意気込む気持ち。
- （エ）負けても仕方がないと開き直る気持ち。

問五、――線⑤「藤堂さんの顔が赤くなった」とありますが、なぜですか。その理由として適切でないものを、次の（ア）～（エ）の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- （ア）子どもが話の途中に口をはさんできたので、腹が立ったから。
- （イ）子どもに当然のことを指摘されて、恥ずかしかったから。
- （ウ）子どもに自分の非を注意されて、気まずかったから。
- （エ）子どもが自分に口答えをしたので、驚いたから。

問六、――線⑥「それ」とはどのようなことを指していますか。十五字以内で具体的に答えなさい。

問七、――線⑦「あそこの花台」とありますが、「花台」の場所を説明した次の文の（ア）・（イ）に当てはまる漢字一字を、それぞれ答えなさい。

花台は、玄関から門の方に向かって置いてある飛び石を途中で（ア）側に曲がったところにあり、そこから門の外までは、（イ）メートルを切るくらいである。

問八、――線⑧「やられた」とありますが、何を「やられた」のですか。答えなさい。

問九、――線⑨・線⑩には同じ言葉が入ります。その言葉として最も適切なものを、次の（ア）～（エ）の中から選び、記号で答えなさい。

- （ア）ずかずかと
- （イ）おずおずと
- （ウ）じりじりと
- （エ）ばたばたと

問十、――線⑩「ぼくが押していないという証拠にはならない」とありますが、やっていないことを明らかにすることを本文ではどのように表現していますか。抜き出して答えなさい。

問十一、――線⑪に当てはまる言葉として最も適切なものを、次の（ア）～（エ）の中から選び、記号で答えなさい。

- （ア）緊張
- （イ）反論
- （ウ）動揺
- （エ）反省

問十二、——線⑫「念のためおまえらの指、見せておけ」とありますが、「藤堂さん」がこのように言つた目的を、具体的に答えなさい。

問十三、——線⑬「同じこと」とありますが、その内容が具体的に示されている部分を本文中から抜き出し、最初と最後の五字を答えなさい。

問十四、——線⑭「いるんだ」の主語を答えなさい。

問十五、——線⑮に当てはまる言葉を十字以内で答えなさい。

問十六、——線⑯「ここ」とはどこを指していますか。本文中から十六字で抜き出して答えなさい。

問十七、——線⑰「この家の人が見ていたかもしれない」・⑱「あーっ！ 見て」・㉑「え、えっ。」は誰の言葉だと考えられますか。最も適切なものを、次の(ア)～(エ)の中から選び、記号で答えなさい。

(ア) ①魔王・②ぼく・③ぼくと魔王と藤堂さん

(イ) ①ぼく・②魔王・③ぼくと魔王と藤堂さん

(ウ) ①魔王・②藤堂さん・③ぼくと魔王

(エ) ①ぼく・②ぼく・③ぼくと魔王

問十八、——線⑰「聞きたいこと」とありますが、具体的にどのようなことを「聞きたい」のですか。「～ということ。」に続くように、本文中から二十五字で抜き出し、その最初と最後の五字を答えなさい。

問十九、——線⑲「しよっぱいものをのみこんだように口もとをゆがめている」とありますが、この時の「藤堂さん」の気持ちとして最も適切なものを、次の(ア)～(エ)の中から選び、記号で答えなさい。

(ア) 龍介くんのお母さんが息子のいたずらをかばっていることに驚く気持ち。

(イ) 龍介くんのお母さんが息子のいたずらをかばっていることを不愉快に思う気持ち。

(ウ) 龍介くんが本当は道場をやめたがっていることを知り、戸惑う気持ち。

(エ) 龍介くんが本当は道場をやめたがっていることを知り、不機嫌な気持ち。

問二十、——線⑳「達成感」とありますが、「ぼく」が「達成感」を覚えた理由として適切でないものを、次の(ア)～(エ)の中から一つ選び、記号で答えなさい。

(ア) 自分で自分の疑いを晴らすことができ、藤堂さんにも謝ってもらえたから。

(イ) 予想外だったとはいえ、自分たちの力で事件の真相を解明することができたから。

(ウ) 「ぼく」のことを犯人だと主張していた藤堂さんが、かんちがいを認めてくれたから。

(エ) 事件の真相を解明できただけでなく、思惑通りに真犯人を見つけることができたから。

問二十一、――線㉔「ちよつとにがい味のものだった」とありますが、なぜですか。その理由として最も適切なものを、次の(ア)

～(エ)の中から選び、記号で答えなさい。

- (ア) ピンポンダッシュの犯人をまちがえてしまい、藤堂さんの面目がつぶれてしまったから。
- (イ) ピンポンダッシュの犯人はわかったが、藤堂さんを傷つける結果となってしまったから。
- (ウ) ピンポンダッシュの犯人をまちがえてしまい、子どもにぬれぎぬを着せてしまったから。
- (エ) ピンポンダッシュの犯人はわかったが、その真相に藤堂さんが腹を立ててしまったから。

二、次の①～⑤の意味になるように、語群〔Ⅰ〕と語群〔Ⅱ〕の言葉を組み合わせて慣用句を作り、それぞれ記号で答えなさい。

- ① 白状する ② 調子を合わせる ③ 味方をする ④ もてあます ⑤ おおげさなことを言う

語群〔Ⅰ〕

- (ア) おおぶろしき 大風呂敷を
- (イ) 油を
- (ウ) 相づちを
- (エ) 手を
- (オ) 口を
- (カ) かた 肩を
- (キ) 背を

語群〔Ⅱ〕

- (a) さす
- (b) わる
- (c) うる
- (d) うつ
- (e) もつ
- (f) やく
- (g) でる
- (h) あう
- (i) むける
- (j) ひろげる

三、次の①～⑤について、一つだけ画数が異なる漢字を(ア)～(エ)の中から一つ選び、それぞれ記号で答えなさい。

- ① (ア) 弓 (イ) 少 (ウ) 収 (エ) 円
- ② (ア) 気 (イ) 百 (ウ) 両 (エ) 近
- ③ (ア) 男 (イ) 吸 (ウ) 防 (エ) 弟
- ④ (ア) 出 (イ) 写 (ウ) 印 (エ) 氷
- ⑤ (ア) 世 (イ) 区 (ウ) 月 (エ) 比

四、次の①～⑦の――線部を漢字に改め、⑧～⑩の――線部の読みをひらがなで答えなさい。

- ① コユウの文化を大切に守る。
- ② 責任をマツトうする。
- ③ マイクをナイズウした録音機。
- ④ どうかマサユメになりますように。
- ⑤ とてもフウリュウな庭。
- ⑥ 相手の作戦をサカテにとって反撃に転じた。
- ⑦ シオドキをみて、父に話した。
- ⑧ おこづかいを工面しておもちゃを買った。
- ⑨ 奮ってご参加ください。
- ⑩ 最後は彼に委ねられた。

総点

一

問一

問二

ハシ。

問三

問四

問五

問六

問七
ア

イ

問八

問九

問十

問十一

問十二

問十三

カ

問十四

問十五

問十六

問十七

問十八

カ

とくういふ。

問十九

問二十

問二十一

二

①

Ⅱ

Ⅰ

②

Ⅱ

Ⅰ

③

Ⅱ

Ⅰ

④

Ⅱ

Ⅰ

⑤

Ⅱ

Ⅰ

三

①

②

③

④

⑤

四

①

②

う

③

④

つて

⑤

ね

⑥

⑦

⑧

⑨

⑩

受験番号

氏名